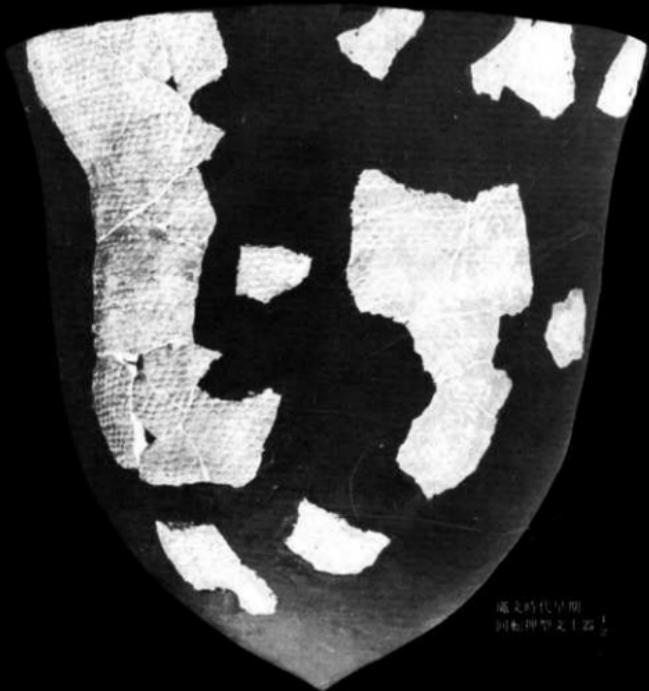


富山県大沢野町

直坂遺跡発掘調査概要



彌文時代早期
回転理型土器

昭和48年1月

富山県教育委員会

発刊にあたって

昭和47年度国庫補助金の交付を受けて、実施された大沢野町直坂遺跡緊急発掘調査では、県内最古の遺構を見つけるなど、多大な学術的成果をおさめました。

調査は文化庁記念物課の指導と、地元大沢野町をはじめ、多数の人々の参加・協力を得て実施されました。

直坂遺跡が県内における代表的な遺跡の一つとして長く後世に伝えられるとともに、本書が直坂遺跡理解のための一助になれば幸いです。

昭和48年1月

富山県教育委員会

目次

発刊にあたって

例言

I はじめに	1
図版第1 直坂遺跡と周辺の道路	1
II 発掘調査の状況と出土遺物	2
図版第2 地形と発掘地点及び層序	2
〈先土器時代・縄文時代草創期及び早期〉	3
図版第3 発掘状況とピット	3
図版第4 石器出土状況	4
図版第5 球形・石器出土状況	5
図版第6 O S - I - 1 地点石器分布図	6
図版第7 先土器時代の石器	7
図版第8 先土器時代の石器	8
図版第9 先土器時代及び縄文時代の石器	9
図版第10 先土器時代・縄文時代草創期 及び早期の石器	10
図版第11 先土器時代の石器及び縄文 時代早期の土器	11
図版第12 縄文時代早期の土器及び周 辺遺跡の遺物	12
図版第13 縄文時代早期の土器	13
〈縄文時代中期〉	14
図版第14 縄文時代中期の住居跡	14
図版第15 縄文時代中期の住居跡	15
図版第16 縄文時代中期の土器	16
図版第17 縄文時代中期の土器	17
図版第18 縄文時代中期の土器・石器・土製品	18
図版第19 縄文時代中期の石器	19
図版第20 縄文時代中期の石器	20
III 直坂遺跡の歴史	21
1 先土器時代の生活	21
図版第21	22
図版第22	23
2 縄文時代草創期・早期の生活	24
3 縄文時代中期の生活	25

N ま と め

参考文献	26
図版第23 縄文時代中期の住居跡	27
図版第24 縄文時代中期の住居跡	28
図版第25 縄文時代中期の住居跡	29

例 言

1 本書は昭和47年8月2日から同年10月1日まで発掘調査を行なった富山県大沢野町直坂遺跡の調査概要である。

2 調査は富山県教育委員会が主催し、文化庁記念物課の指導と、大沢野町の協力を得て実施された。

3 調査参加者は次のとおりである。

文化庁記念物課小林達雄、富山県教育委員会文化課権本正（調査担当）・舟崎久雄・神保孝造・氏継子、大沢野町公民館長正雄、国学院大学石岡憲雄・鶴野孝・木村鉄次郎・木野美鈴・熊川英子・小野美代子・吉沢美智子・新井卓子・野本孝明・明治大学山本正敏・久々志義・伊藤裕助・立正大学柳井耕・富山考古学会西井龍儀・西井保・亀田正夫・山内賢一・地元杉本泰枝・坂口初枝・柳瀬スベ・坂口トキ・岩下ヤイ・東喜久枝・清水花枝・清水スミ子・竹森スベ・岩下よしお枝・茶免秋子・明堂夏子。

事務局は文化課に置き、庶務は課員の協力を得て森田文夫が主に担当し、課長八尾正治、課長代理青柳正美が総括した。

4 調査期間中、富山考古学会長澤義先生をはじめ、栗山邦二・大屋良吉氏の指導と援助を得た。また、北陸電力・関西電力兼津保線所からは、空中写真の提供を受け、杉本一雄氏には学生諸氏の宿舎ならびに連絡所を提供願った。記して謝意を申し述べる。

5 本書は写真及び図版を中心とした概報であり、充分な記述は行なっていない。細部については後に研究報告されるはずである。今回の図版作成・執筆は権本が行なった。



図版第1 直坂遺跡と周辺の遺跡

I はじめに

直坂遺跡は過去、縄文時代中期後葉の遺跡として著名であり、つれづれに訪れる人も多かったようである。

昭和46年8月頃、牧野造成のため、遺跡地の表土が除去され、縄文時代中期の炉跡が露呈した。その後、数度にわたる現地踏査の結果、先土器時代・縄文時代早期に属する地点が新たに発見され、昭和47年度に遺跡地全域を対象とした緊急発掘調査が実施されることとなった。

直坂遺跡は、神通川が富山平野へ流れ込む、ちょうど山間部と平野部の境界に形成された右岸側最高位（標高約170m）の段丘上に立地する。神通川は、その源を遠く飛騨地方に発し、石器時代には「人」及び文化交流の主要ルートの一つとなっていたものと考えられる。

このような地理的環境を持つ大沢野町には、縄文時代中期中葉から後期初頭のかなり規模の大きい遺跡が二、三知られている。この時代は県内の遺跡数がもともと増加する時期であり、しかも「土器」の形・文様等が独自のカラーを強く發揮した時代でもある。直坂遺跡の中期地点・春日遺跡・塙遺跡等も県内他地域の遺跡とその内容がよく似ており、特別変わった相違は認めにくい。そのような縄文時代中期頃の人達の、規模の大きい遺跡に残された生活の起源に關係のある、更に古い石器文化の内容は、今のところ県内では十分にわかつていなかった。

その解決の糸口は今回の直坂遺跡の調査がないようである。

日本におけるもっとも古い石器文化と考えられている

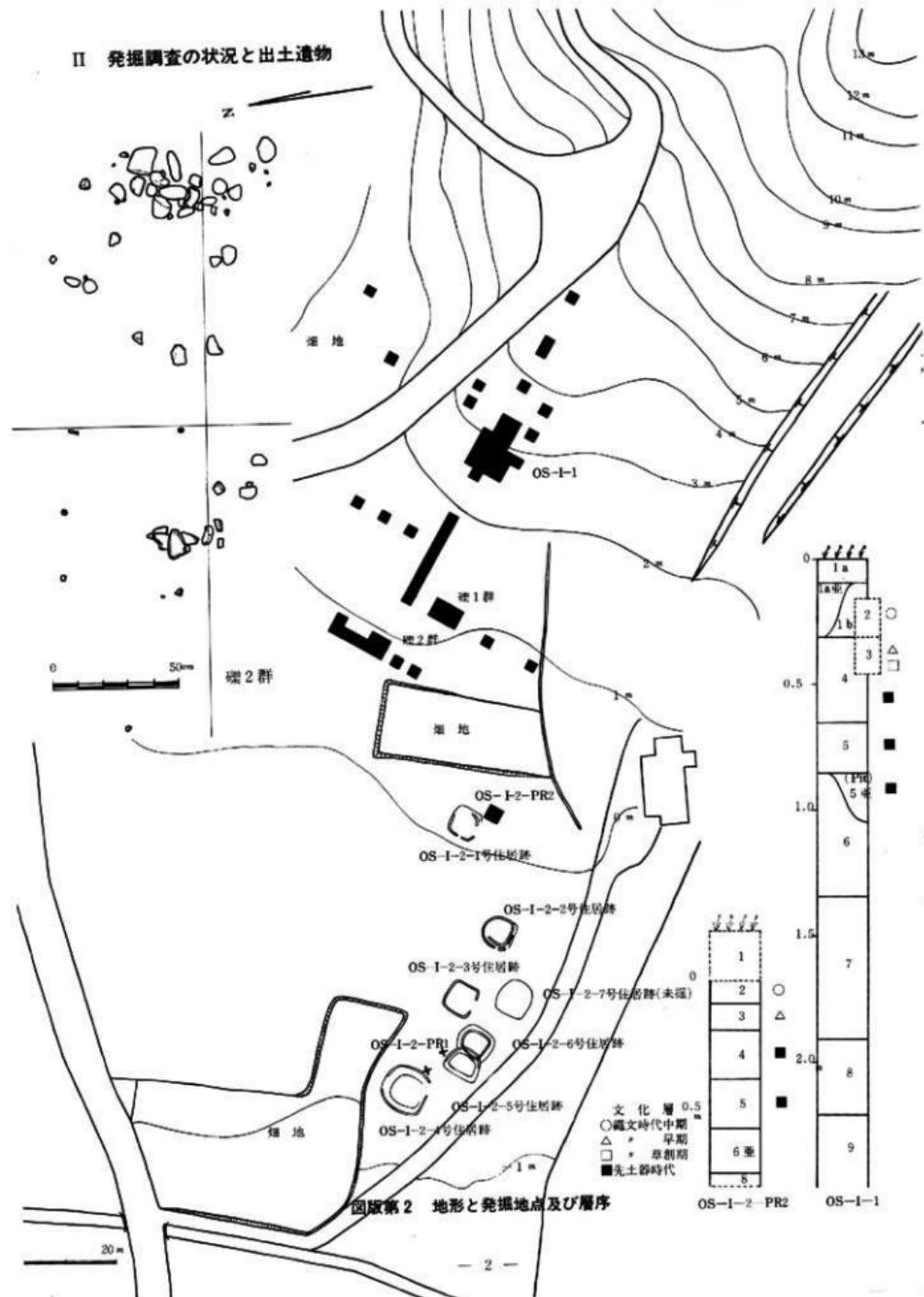
先土器時代の遺跡は、県内に約40カ所存在し、更に縄文文化前業の遺跡は10カ所程度知られている。そのなかで遺物の内容がもっとも多岐にわたり、しかも充実しているのが直坂遺跡である。直坂遺跡の遺物はその作り方及び系譜が県外のいろいろな遺跡に求められる。そのようなことから直坂遺跡の発生段階を県外他地域と、県内各遺跡とを結ぶ中継基地的な性格に置くことができそうである。この点の更にこまかいことは、近辺のはば同時代の遺跡と考えられる直坂II・同里遺跡等の研究とともに次第に解明されることになると思うが、このことは一富山県の遺跡と考える以上の学術的位置を持つものと言えよう。

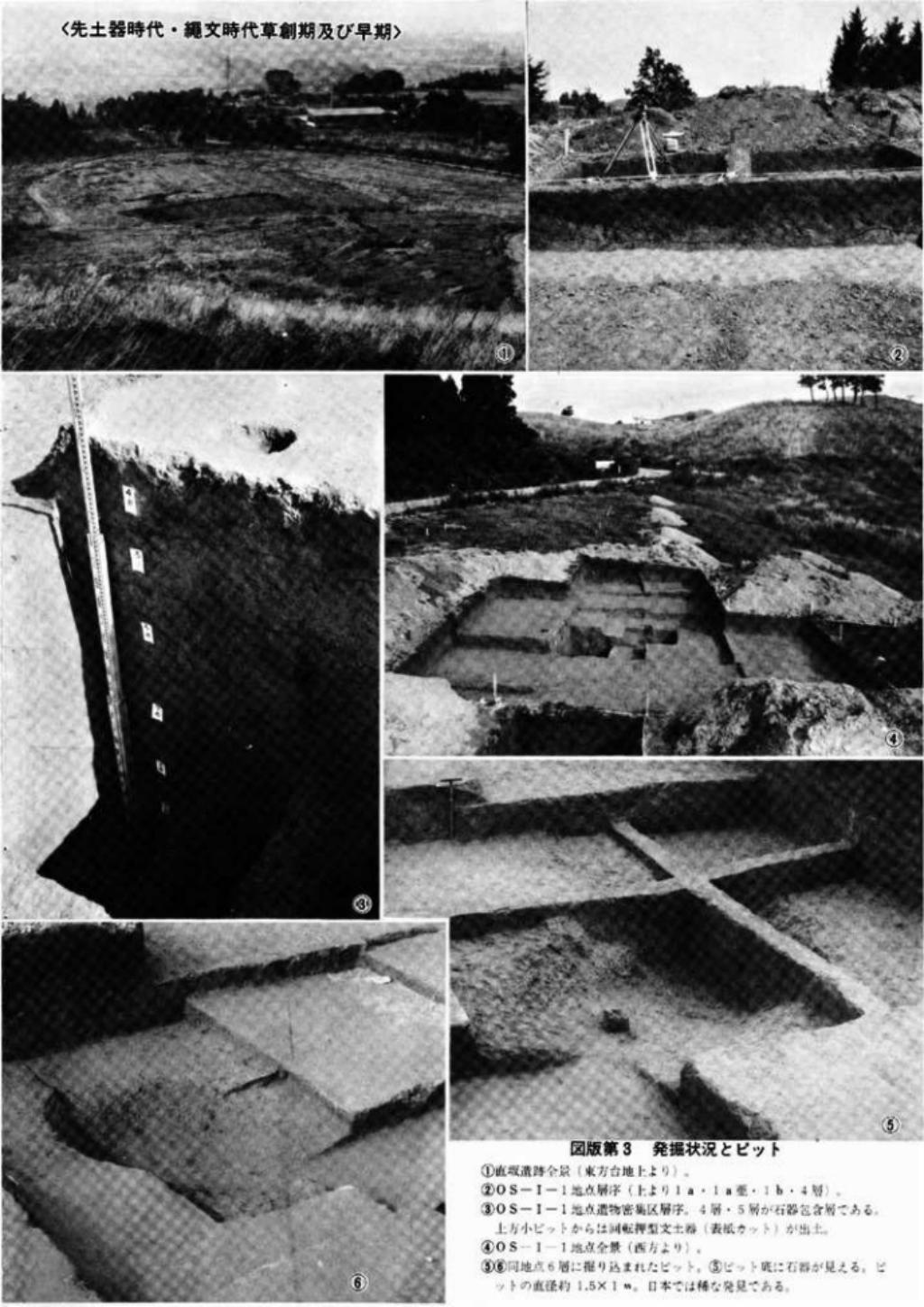
また、直坂遺跡の縄文時代中期地点においても考古学上重要な新知見が數多く得られた。

県内の該期遺跡数が比較的多いことは先に述べたが、生活の跡を直接示す住居跡等の発見は少なかった。そのような中で炉が内部に持ち、住居の平面形をほぼ完全に残す住居跡が一時に6棟も発見されたのは初めてのケースである。しかも埋葬に關係のある埋甕を入口部に持つ等、当時の生活を生き生きと示してくれている。文化交流を考える上で当遺跡の重要性を更に倍化した感がある。

このように数々の新知見に姿を変えて、土をはがされわたくし達の目の前に登場した直坂遺跡のヴェールは、底知れぬ過去の生活を以後示してくれるであろう。

II 発掘調査の状況と出土遺物





図版第3 発掘状況とピット

- ①直坂遺跡全景（東方台地上より）。
- ②OS-I-1地点層序（上より1a・1a重・1b・4層）。
- ③OS-I-1地点遺物密集区層序。4層・5層が石器包含層である。
上方小ピットからは圓軸押型文土器（表紙カット）が出土。
- ④OS-I-1地点全貌（西方より）。
- ⑤同地点6層に埋り込まれたピット。⑥ピット底に石器が見える。ピットの直径約1.5×1.4m。日本では稀な発見である。



図版第4 石器出土状態

- ①OS-I-1地点石器密集状態（4層内）。
- ②-④同地点ナイフ形石器出土状態 ②-1層、③-1b層、④-1a層。
- ⑤⑥同地点5層内の石器出土状態（この下からピットが検出された。5層と4層の石器には接合する例が認められる。）。



図版第5 磨群・石器出土状態

① 磨1群出土状態（4層内。塊石が多く認められ、塊の間からブレイク・チップが数点発見された）。

② 磨2群出土状態（4層内上部中央に塊石があり、その周辺から20点近くの不定形なブレイクが発見された）。

③ 第4号住居跡附近の石器（5層? OS-I-2-P R 1）

④ OS-I-2-P R 2地点層序（上から3・4・5・6層、8層。石器は4・5層から発見された）。

⑤ 同区石器出土状態（5層内。塊石等が見える）。

◎道具を作った場所と食物を調理した場所

先土器時代はもっぱら狩猟・採集によって人の生活が支えられた時代である。その生活を支える道具が石器・骨角器・木器であることはうたがうる余地がない。当時の人は使う目的等によっていろいろと場所を使いわけたらしく、それを裏づけるような遺物の出方方がしばしば認められる（小林他1971）。直阪遺跡でも、時代の同時性は立証ににくいが、その使いわけが認められる状態で遺物が発見された。

OS-I-1地点は石器・フレーク・チップが約1,200点ほど発見されており、その多くが複合する。これにより石器を作っていた場所であることがわかる。しかも、フレークない石片に骨あるいは木を削った痕が残って

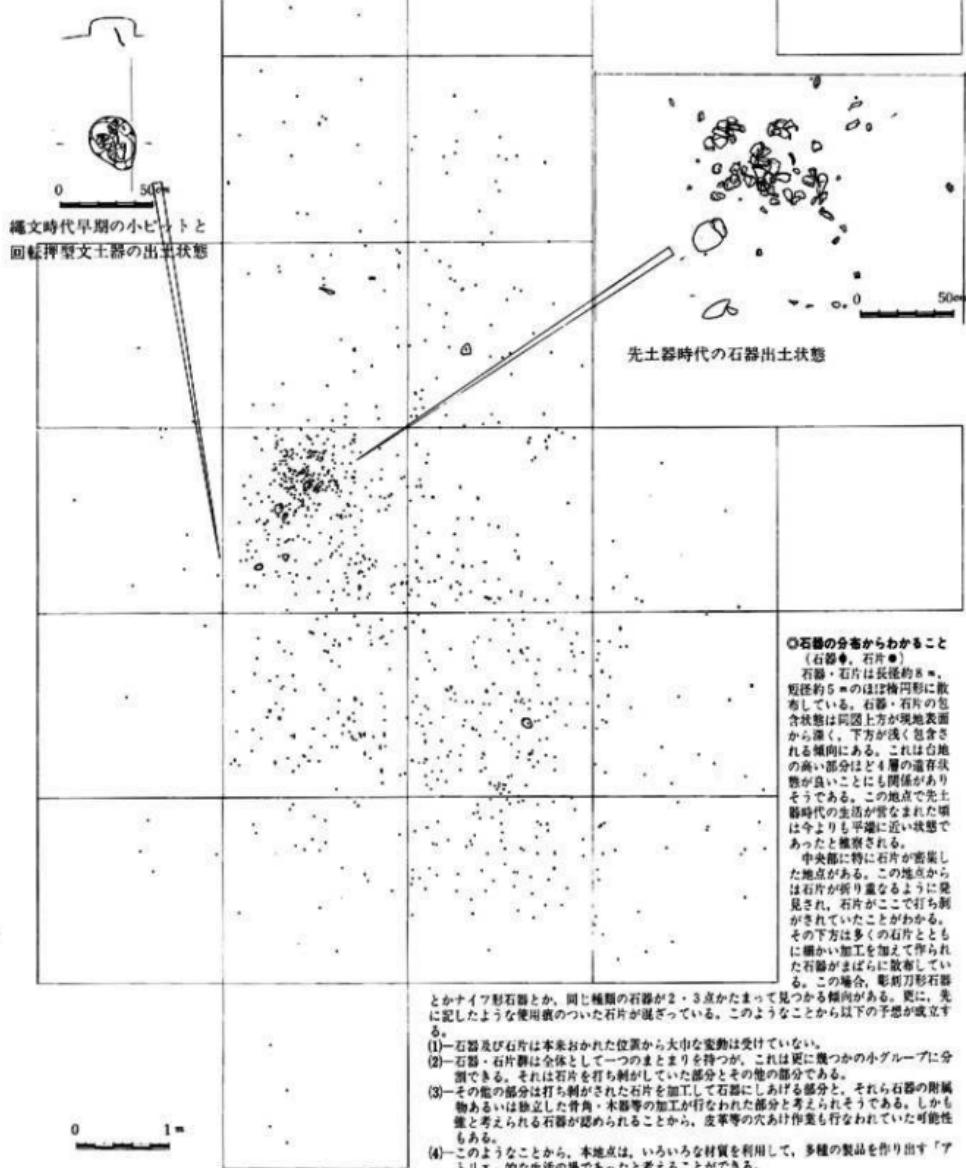
いることから（図版第21上方）、いろいろな道具を作った場所と結論づけられる。

今一つは複群である。焼けた石から、石焼のような食物調理が行なわれたことが想像できる。このような地点からは石器があまり発見されていない。

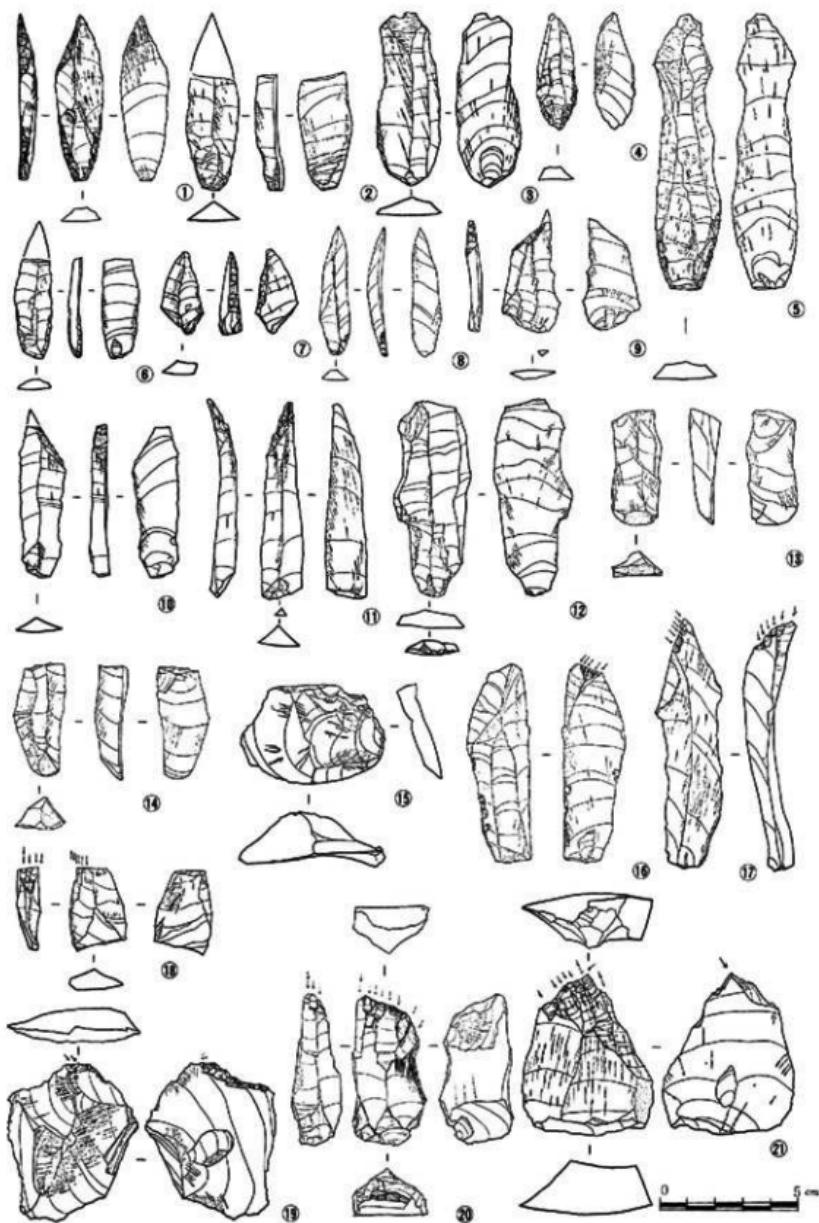
図版第6

OS-I-1地点

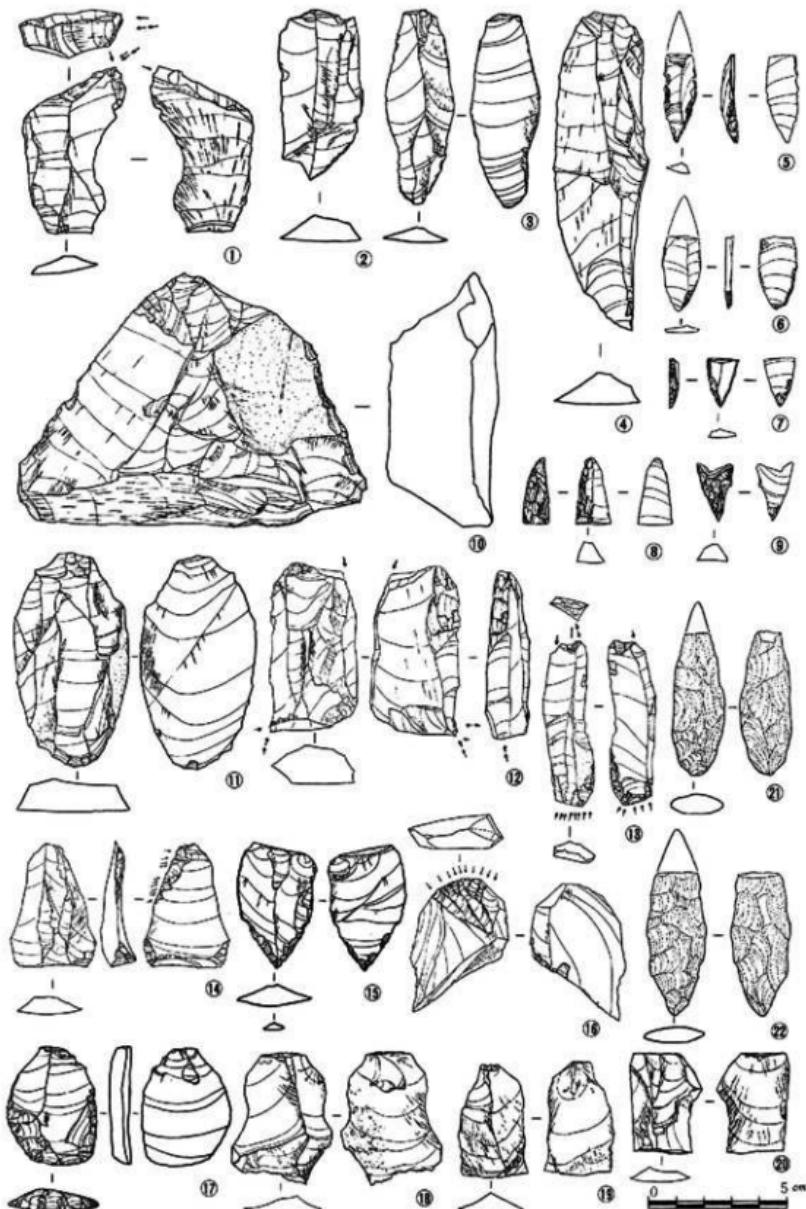
石器分布図



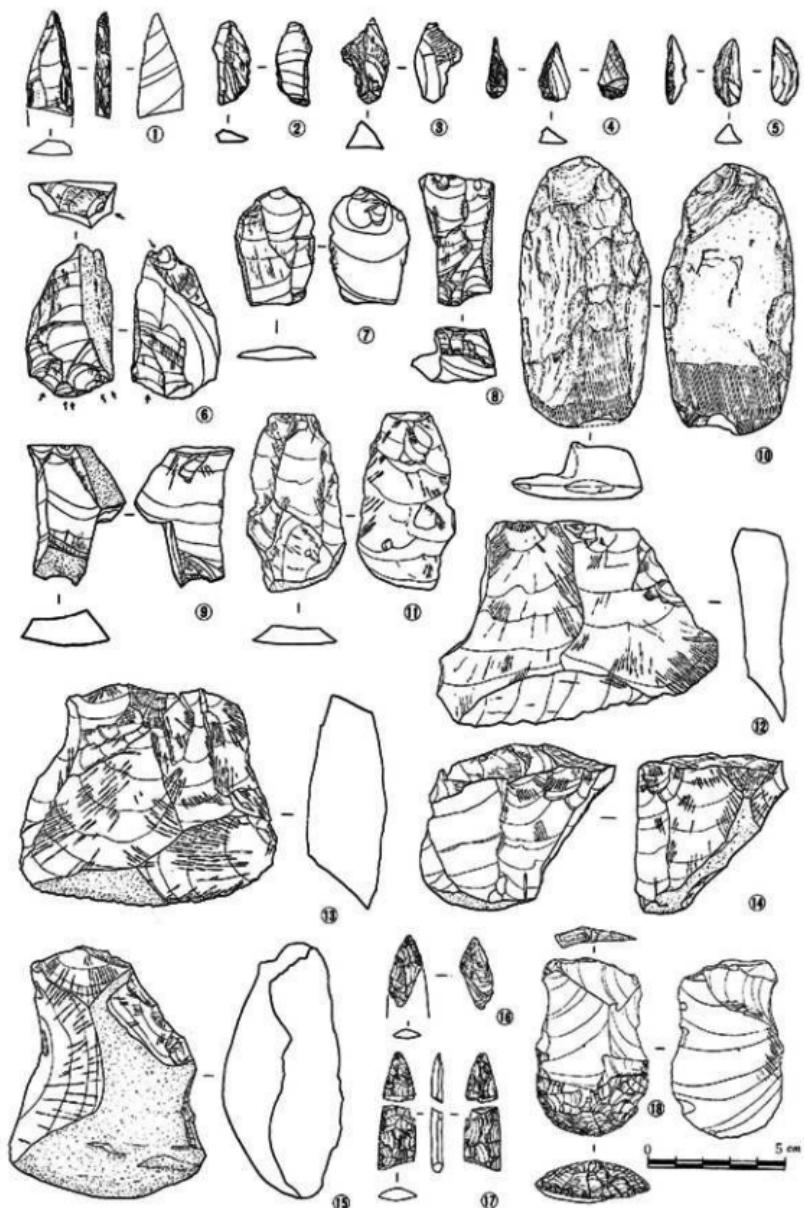
図版第7 先土器時代の石器



図版第8 先土器時代の石器



図版第9 先土器時代及び縄文時代の石器





図版第10
先土器時代・縄文時代草創期及
び早期の石器(1)



◎先土器時代の石器の種類

石器は時代の流れとともにその形、種類、作り方で変化する。その変化の仕方は多少地域的なバリエーションを持つが、ほぼ全國的に似たような移り変わを示す。

先土器時代の石器は規則的に細字などで打ち削がされた石片の形をあまり變えずに作り出される特徴を持つ。その石片は縦(ひしよ)うどカミリの刃のようにはくなくており、その削られ方・形状により規定あるいは横長剥片と呼ばれている。横長剥片のうち特に形態が整っているものを石刃と呼び、その石刃を上手に数多く作る方法を石刃技法と呼んでいる。OS-I-2地点ではこの石刃技法が特に著しく認められる。この石刃を加工してナイフ形石器(図版第7-①-⑧等)・鎌形石器(同⑨-⑪)・彫刻刀形石器(同⑫-⑯等)・櫛形石器(同⑰-⑲)が作り出される。

このような石器は先土器時代にもっとも多く作り出されており、縄文時代にはかなり形の異なった石器が作り出される。同じ縄文時代に盛興した磨製の技術は先土器時代にその前身が認められており、本道跡からも局部磨製石斧(図版第9-⑩)が見出されている。この石斧が出土した地点はOS-I-2-P R 2地点の近くで、ここからは石刃技法によらない



石刃刃形石器



石刃



先刃型擴器形石器等



横長剥片を利用した石器及び円錐を範本に加

工して刃をつけたショッパー、ショッピング

トル(図版第10-⑮)

が見出されている。先

土器時代の石器として

はそのほかに円錐を利

用したハンマーとか

拂石等がある。



石刃



⑧



ショッパー、ショッピングトル

⑨



局部磨製石斧

図版第11
先土器時代の石器及び縄文時代
早期の土器 (1)



◎縄文時代早期の土器

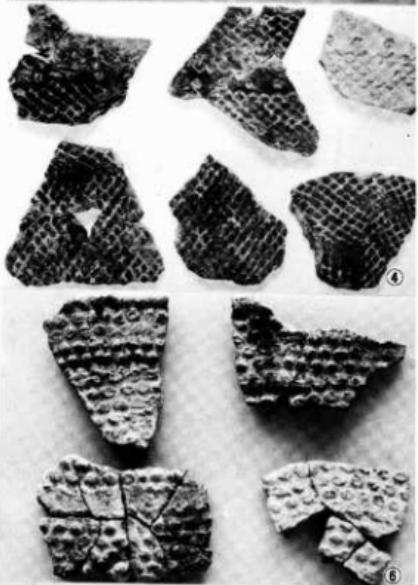
縄文時代は土器等の特徴をもとに、草創期・早期・前期・中期・後期・絶滅の6期に区分されている。各時期は更に土器の細かい特徴によりおおよそ10型式前後の土器群に細別分けられている。

富山県では気候期の石器【直坂遺跡発見の石器（図版第9-⑩～⑪）】もその例の一つである】が発見されているが、土器はまだ十分にわかっていない。今のところ確実にしてもっとも古い土器群は早期の同軸押型文土器と呼ばれるグループである。

同軸押型文土器はその名のとおり、始築程度もしくはそれより細い円柱に、山形・格子目形・橢円形文様を規則正しく印刻し、この原体を土器面に規則押圧することによって文様をつける土器群である。文様等の形を変えるながら、ほぼ全国に同種の技法が伝わっている。

県内では直坂遺跡の土器群がもっとも充実しており、無文部を残しながら規則正しく帶状に施文するもの、文様の粒が非常に細かいもの、器面全体に規則正しく施文するもの、不定方向へ施文し、器面を埋めつくし器土は植物組織を含ませたものが認められる。これらは全て時期差を持つて作り変えられた土器群であると考えられている。

また、この同軸押型文土器には少量の撚糸文土器・貝殻文土器が伴なうことが知られている。



図版第12
縄文時代早期の
土器及び周辺遺
跡の遺物 (1/2)



◎縄文時代草創期・早
期の直坂遺跡と周辺
の遺跡

縄文時代草創期・早
期の遺跡に乏しい富山
県にあって、直坂遺跡を
含む一帯は、該期研究にあたってもっとも
重要なフィールドの1
つとなっている。

直坂遺跡の草創期資
料は有舌尖頭器の断片
と、それを小片に分断
したと考えられるもの
で代表できる。今回の
調査では地点の確認す
ら行なえなかったが、

有望な地点がどこかに眠っているようである。

早期資料はかなり大量に発見されている。土器群でながめると、少な
くとも4段階にわたって変化を受けており、かなり長期間、本道跡にお
いて存続使用されていたことがわかる。このように長期間にわたって、し
かも大量に回転押型文土器が使用された遺跡は他になく、該期における
中核的遺跡としてクローズアップされる。

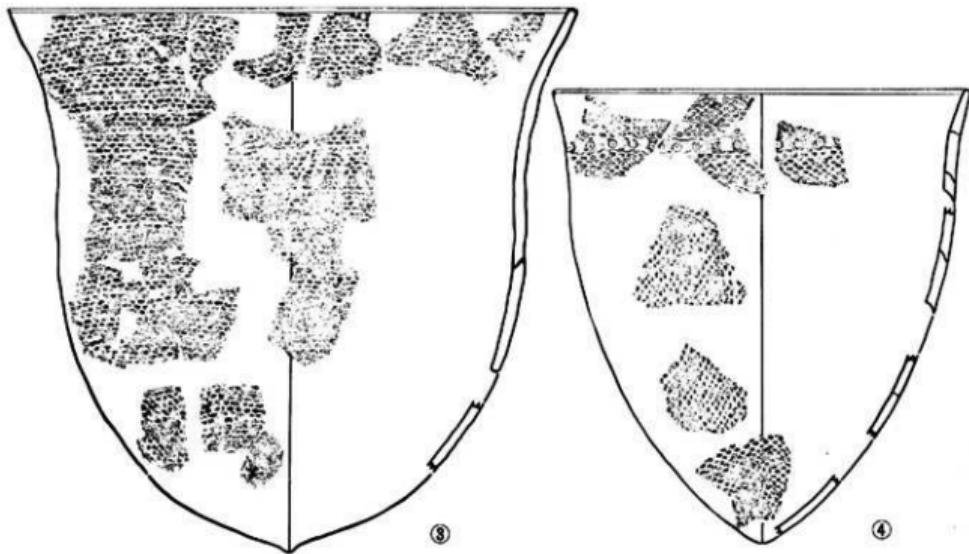
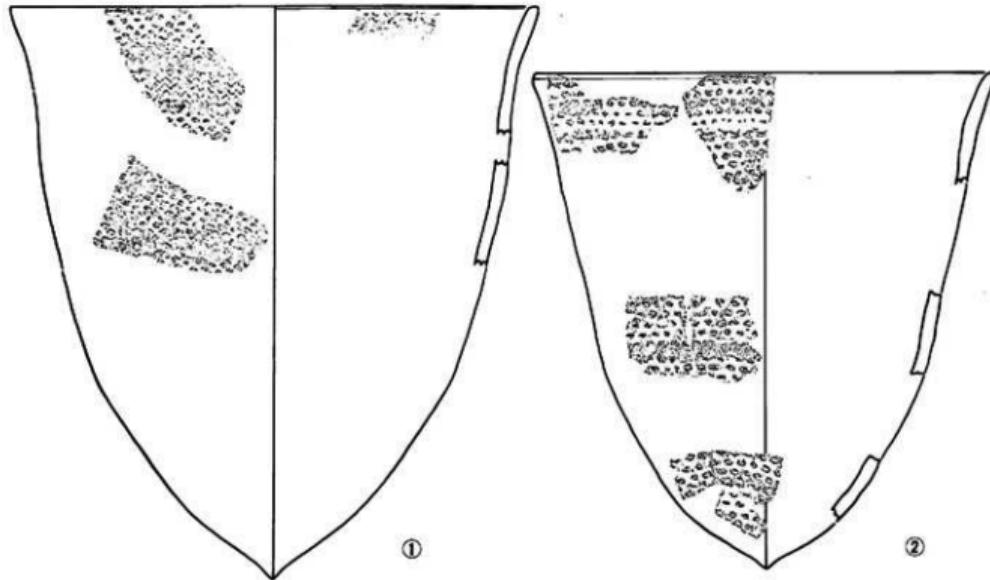
直坂遺跡周辺の縄文時代前期に属する遺跡としては八木山遺跡、直坂Ⅱ
・同田遺跡が知られている。

八木山遺跡からは草創期の有舌尖頭器が、直坂Ⅱ遺跡からは草創期の
尖頭器・有舌尖頭器、早期の回転押型文土器、石旗等(図版第12-⑦⑧)
が発見されている。直坂Ⅱ遺跡からは早期の回転押型文土器等(同図⑨)
が発見されている。これらは正式の発掘調査を受けていないため、正確
にはその内容がつかめていないが、直坂遺跡とともに、重要な意味を持
っている。

今の時点で判断できることは以下のとおりである。

(1) 墓内の縄文時代草創期は、県外の該期遺跡と較べ同じくしており。
土器が発見されるとすれば隆起縄文系、爪形文系、押印縄文系土器群
と考えられる。それは石器群の類似性から肯定できる。

(2) 早期回転押型文土器には、信州、飛騨地方の土器群と関連の強いもの
のと畿内、東海地方の土器群と関連の強いものとが認められる。前者
は少なくとも直坂遺跡を1つの中核点にして県内に拡がった可能性を
持つ。



図版第13 縄文時代早期の土器

0 5 10cm



〈縄文時代中期〉

第1号住居跡

住居跡全体が焼土と炭化物で充満されていた。住居跡の形は隅内方形で、一辺が切たため消失している。周溝がとざれる部分に埋甕があり、板状の石蓋がかぶせてある。甕は穿孔された底部を上にして埋められていた。甕は縄文のみで飾られたもので、赤土に穴をあけ、甕を入れた後ただちにその覆り上げた赤土で埋められたと考えられる。住居の中央には石柱單式の炉がどっしりと据えられており、内部には大形の甕がねかれていた。柱は4本柱である。

住居の入口部は埋甕のある部分と考えられる。住居の隅に2個を単位とするやや大型の河原石が置かれていた(図版第23上)。



第2号住居跡

2棟の住居が重複している。今後リに遺存状態の良い方を2号住居跡と呼んでいる。

住居の形はかまぼこ形で主柱穴は4本確認されているが、ほぼ5本程度と考えられる。周溝はうすまき状にめぐっており、部分的に二重溝を設けている。かまぼこ形の直辺を構成する部分と、部分的な溝にはさまれるように石蓋をかぶせた埋甕が発見された。これは口縁部を口にしており、底部は穿孔されている。埋め方は1号住居跡例と似ている。

住居の中央には炉がおかれており、炉の中央には扁平な石が2枚敷かれていた。炉内には焼土がまったく無く、住居廃絶時にぬかれたものと判断できる。

これと重複すると判断される住居のプランは、切土のため不明で、半壊した炉の抽出のみで終った(図版第23下)。



第3号住居跡

角の強い方形の住居跡である。

直坂遺跡ではもっとも遺存状態の良い住居跡である。主柱穴は4個で、埋甕のある側を広く残して奥よりに設けられており、ほぼ中央に設けられた複式の炉も、奥に片寄っている。周溝のとぎれから、埋甕の設けられた部分が入口部と考えられる。

炉はかなりしっかりしており、主炉が深く、添炉が浅い。炉の中には全く焼土、炭化物が認められなかった。

外邊に1m程度のいわゆる袋状ピットが認められた。3号住居跡との関係は不明である(図版第24上)。

図版第14 縄文時代中期の住居跡



第4号住居跡

直板造跡ではもっとも規模の大きい住居跡である。形は馬蹄形で、左右一部ずつ周溝がめぐる。外壁及び周溝の内側はテラス状になっており、2個程度を単位にした石が置かれている。このテラス状の部分から数多くの磨製石斧が検出された。

柱穴は8個で、かなり大きく深い。その全てがテラスの内側に設けられている。

炉は、超大型のものが中央に設けられており、それは最低2度の改築が行なわれている。第1回目は横円形に構築され、後、複式炉に改変された。複式炉段階の添炉は、厚く充満した焼土の上に作られており、その事実を物語る。第1回目の炉石は、かなりぬかれ、移動されており、第2回炉の同じくも移動の結果完成された。現存する炉石は、全て青い石で構成されており、2回目以降、ぬき、転用された同炉石のゆくえがある程度追跡できる。

また、同住居の入口部は直道部と考えられる（図版第24F）。



第5号・6号住居跡

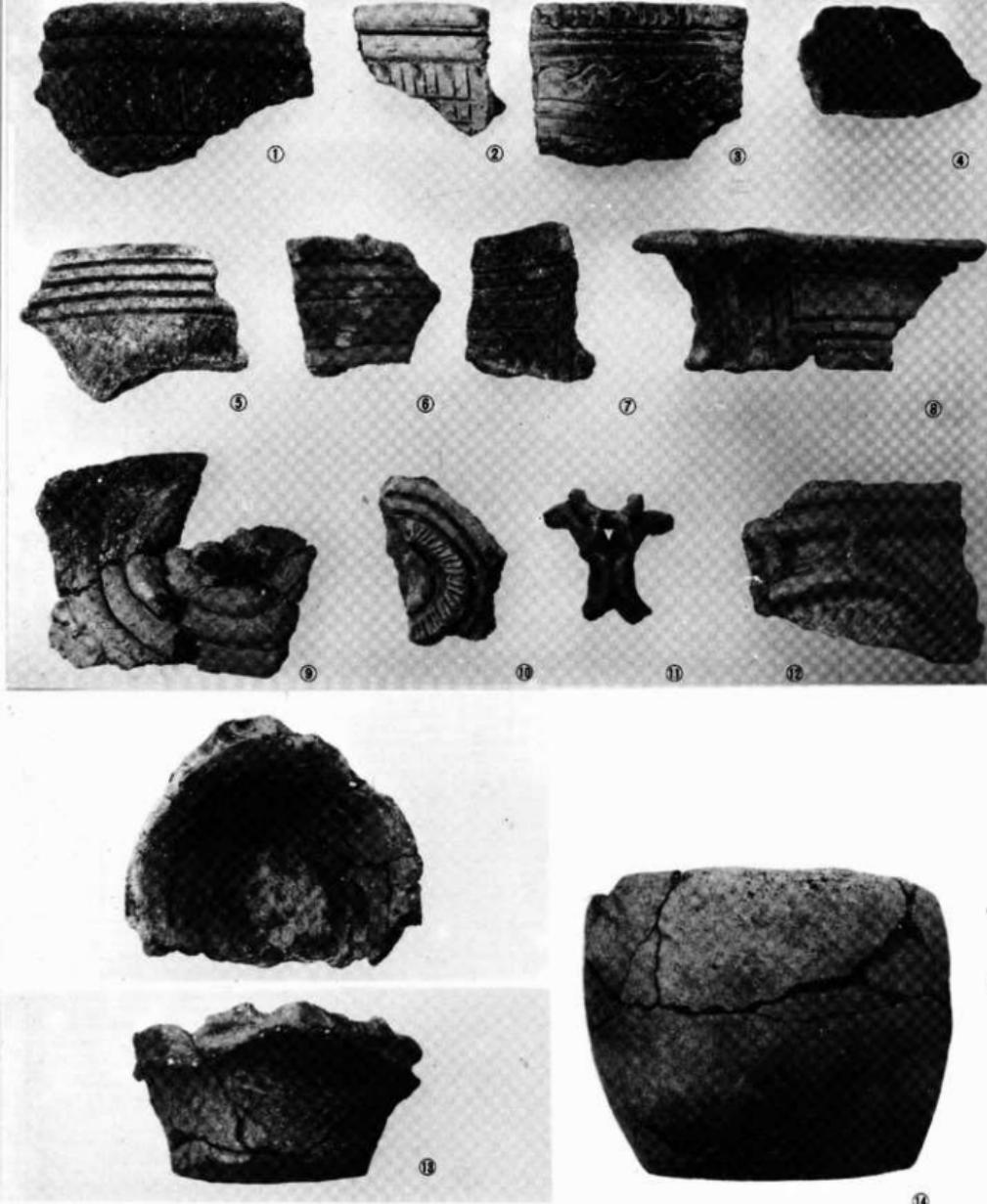
かまほこ形の2棟の住居が重なっている。

5号は直辺の角に入口部が設けられたと考えられる。4号同様周溝内にテラスを持っており、テラスの上には、1個を単位とした石が置かれている。炉は中央におかれ、複式となっている。添がの中には2枚の板石が敷かれている。主柱穴は8本程度と考えられる。

6号には、目を見張らせるばかりの、超大型の炉が設けられている。大きな河原石を二重に設け、内部には土器片を敷いている。土器片の下に埴土が認められることから、かなり長期間使用された後に、土器片が敷かれたことがわかる。住居の床面はすこぶるかたく意識的につきかためられたと考えられる。この場合、細砂を混入した可能性が強く、この状態は2号でも認められた。6号にもテラスが設けられており、若干の石が置かれている。主柱穴は6本程度と考えられる。

5号と6号の切合の関係は5号が新しく、6号が古いと認められた。6号の床面がかたく、しかも高いため、その原形を余り変えずに、5号のテラスとして利用されたと考えられる（図版第25）。

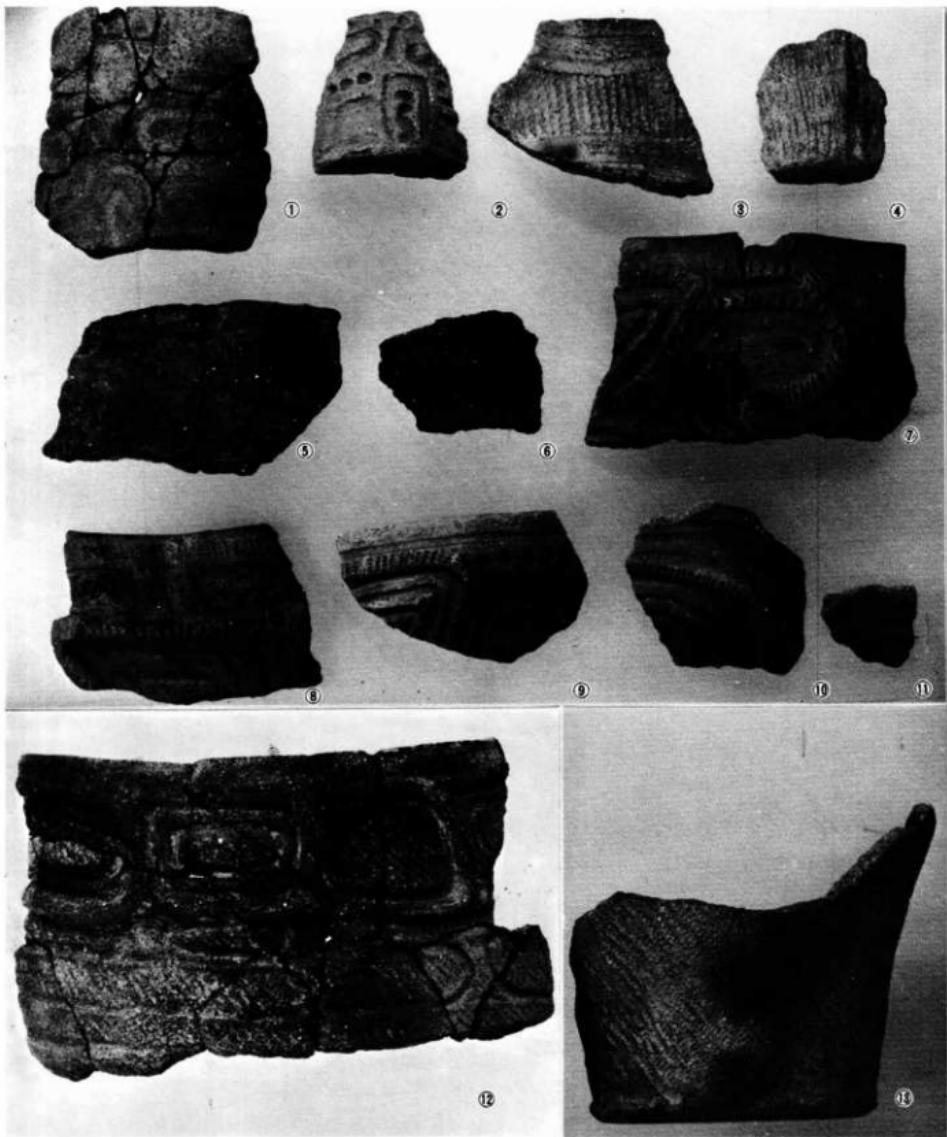




図版第16 縄文時代中期の土器 (1/2)

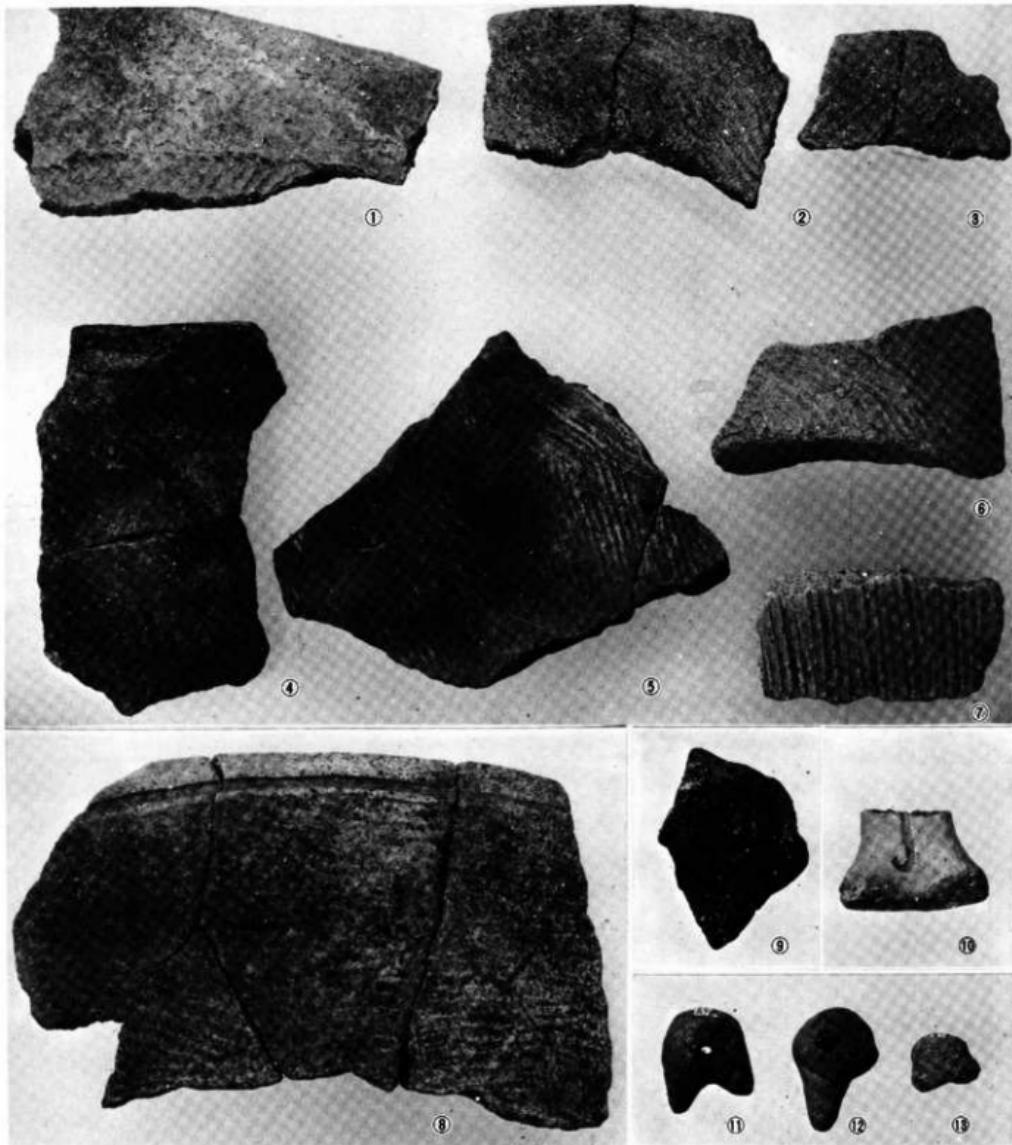
中期前葉から中葉にかけての土器。竹を半分に割って付けた文様が目だつ。

⑬は小型の土器で、内部に朱漆が残っている。特別の用途が考えられる。



図版第17 繩文時代中期の土器 ($\frac{1}{2}$)

中期後葉の内、古い部分の土器。円形もしくは橢円形の区画が目立ち、隆起線の上には貝殻文が付けられる。古府式と、串田新式の中間に位置づけられる。



図版第18 縄文時代中期の土器・石器・土製品 ($\frac{1}{2}$)



①～⑧は縄文を主に使った土器である。いろいろな時期にこの文様が用いられた。

⑨⑩は土偶で、⑪～⑯は土製の装身具である。⑭はヒスイの玉の未製品で、⑮は釣針形の石器である。⑯～⑰は矢の先につける石鏃である。この種の石材は県内には無く、県外から移入された。

◎縄文時代中期の土器

縄文時代早期の土器は、その大部分が尖底深鉢形の土器である。器種のヴァラエティーも、大・小の違いなどで、変化にとほしい。

早期の後業になると、器壁に植物模様を混入させる土器が主流となり、前期の段階をむかえる。

前期は早期の伝統を受け継ぎ、植物模様を器壁に混入させる土器で、その前葉をおお、中葉からは器種にヴァラエティーを持たせはじめる。この頃は、竹を半分に削った道具（半截竹管）を用いて、爪形や平行沈線の文様が土器面に付けられる。

そして前期後葉には器面から浮きあがって見える文様（隆起線文）が登場し、中期の段階をむかえることになる。

中期の土器は、以前厚手式土器と呼ばれていた。他の時期の土器にくらべ、器壁が非常に厚い特徴を持っているからである。

中期前葉段階は半截竹管文が盛行する。竹管の巾は前期にくらべて広くなり、文様自体が複雑化はじめる。仏像の台座によくつけられる蓮弁に似た連華文と呼ばれる文様がはやるのもこの時期である。直板道跡にはこの段階のやや新しいものが少量認められる。

中期の中葉は半截竹管文がもっとも発達し、土器面が複雑な溝巻文、爪形文等でうすめつくされる段階である。直板道跡ではこの段階の土器はあまり認められない。

中期の後葉は先に記したように、地方的な独自の土器様式が開花する時期である。この土器群は、大門町の串田新遺跡出土資料を模式として串田新式土器と呼ばれている。最近この地方的な串田新式土器とそれよりも一段階古い古市式と呼ばれる土器群とのちょうど中間に位置する土器群が知られるようになり、それはブレ（以前）串田新式土器と仮に呼ばれている①。直板道跡の中心的位置を持つ土器群が実はこのブレ串田新式と呼ばれる土器群である。詳細は出土資料の整理を完了して発表されることになるが、この時期以後、地点を変えながら後期初頭まで生活がくり返されたようである。

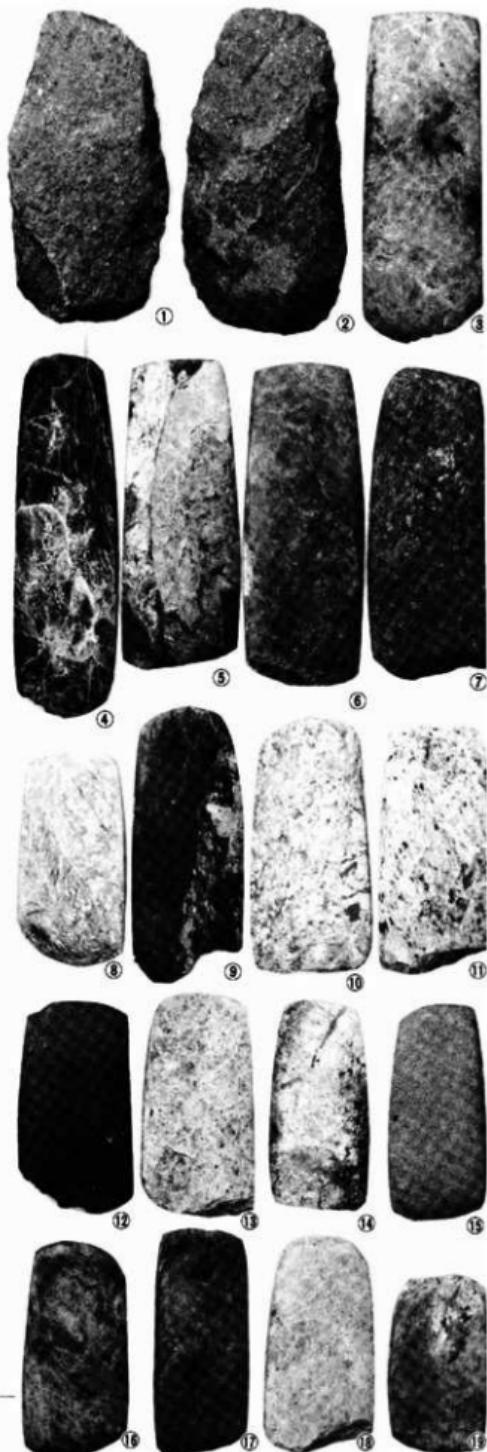
ブレ串田新式の段階の土器は、まだ不明な点が多い。もっとも大きな特徴の一つは、アナグラ属系の貝殻腹縫を利用した連續斜突文が、串田新式土器同様多用されることである。

しかし、串田新式土器群は口縁の突起が大きく、波状に発達しているのにくらべ、ブレ串田新段階ではそれが少なそうである。しかも、地文となる隆起線は、ブレ串田新段階の方が顕著であり、中期中葉の伝統を多く残している。

このような両者のちがいを完明するための資料として本直板道跡の資料はきわめて有効であろう。

中期の土器には、文様のきれいな上で示した土器の他に、縦目をつけただけの土器等も多用される。直板道跡では、縦目用に用いられたそのような縦が三例発見されている。

註①この問題及び北陸の中葉全般については高橋勝喜・小島俊彰両氏の研究があり、種々教示を得た（高橋1965、小島1972）。



図版第19 縄文時代中期の石器 (1/3)

○縄文時代中期の石器

縄文時代の石器のヴァラエティーは、前期の段階でその基礎的なものが出現する。

それらの石器は、狩猟用の石槍、石槍、食物調理用の石皿・椎石、木工・植物採集用の磨製石斧・打製石斧、漁獲用の石錐、その他の加工工具である石錐、石錐、砾石、石匙、身に飾る装飾品等に分類されている。

中期に出現する特殊な石器には、祝賀的性質の強い大型の石棒がある。これは今のところ直阪遺跡では発見されていない。この祝賀的な石器は中期以後、数量・種類を増してゆく。

直阪遺跡で、もっとも目立って出土量が多かったのは磨製石斧である。

磨製石斧は大略、大・中・小の三型に分類できる。それぞれは機能的差異を持っていたものと考えられる。

直阪遺跡の磨製石斧の中には大型の製品が多い。石質はほとんどが蛇紋岩で、少量異なった石が用いられている。この石斧は、今、実物の特徴によって、更に細かな分類が可能である。

その一つは、基本的な製作過程の各段階にとどまっているものと、今一つは刃部欠損後、刃が再創されたものである。

前者は、大型の自然石から手頃な大きさの剥片に剥ぎ取られたもの、それに荒削加工を加えたもの、更に細かい打撃を加え、大体の形を作りおえたもの、一部に磨きを加えたものに分けられる。これは一種の製作工程を示すものと考えられる。直阪遺跡からは発見されていないが、中期の他の遺跡では以上と異なる方法で作り出される磨製石斧が知られている。その一つは擦切手法と呼ばれる方法で、原石を擦切って分析して磨製石斧に仕上げる方法で、もう一つは、手頃な自然石にいきなり磨きをかけて磨製石斧に仕上げる方法である。以上にあげた三つの製作方法の関係は、今のところ不明確であるが、時間的な差異を持って使いわけられた可能性が強い。

直阪遺跡の今一つの特徴的な形状を持つ磨製石斧群は巾は大体同じであるが長さがいろいろ異なる群である。

これらの刃部の状態をよく見ると、よく使用されてその痕跡を残すものと、打削によって刃先が若干整えられたもの、使用的痕跡のない新しい刃先が磨き作られたばかりのものに大別される。この若干刃先の整えられたものや、新しい刃先が作られたものは、機知短い。このようなことから、一度完成され、使用された石斧の刃先が使用に耐えないと欠損した場合、一定の作業を経て刃先が再創され、何度も実際に供されたことが理解される。

直阪遺跡の4号住居跡からはこのような石斧で各種の形状を持つものが40本近く発見されている。住居の大きさが地にくらべて大きいことも考え合わせ、特殊な位置を持つことはたしかであろう。

直阪遺跡ではこの他に小型の磨製石斧、ハート形に近いきれいな石錐、ヒスイの玉の未製品、石皿、椎石、砾石、凹円石、石錐等が発見されている。先に書いた石斧について目立つものは、自然端の両端を簡単に打ちいて作った石錐である。これらが作られ、使用されることによって直阪遺跡における縄文時代中期の人の生活が推測されたわけである。

図版第20 縄文時代中期の石器 (1/3)

III 直坂遺跡の歴史

I 先土器時代

富山県における先土器時代の遺跡数は、現在のところ40ヶ所以上となっており、その数は増加の一途をたどっている。

石器の製作方法や、基本的な石器の形態でグループを行なうと以下の群に要約できる。

上市町眼目新丸山B〔江坂他1959〕・小矢部市安養寺〔西井1966〕・福光町鎌平林〔西井1972〕遺跡等を標準とする東山系の石器を中心とする群、福光町入母〔西井1968〕・小杉町新造地〔西井1963〕遺跡等の小型ナイフ形石器を中心とする群、各地で散見する瀬戸内地方と関連性の強い群等がそれである。これについては、すでにくわしく述べられている〔西井1972〕。

直坂遺跡からは、以上の群とやや趣きを異なる群が幾つか発見されており、その内容は複雑である。

O S-I-1 地点は東山系の流れとは違う手法で石器が作られている。石核が約20点近く発見されているが、打面は一端にのみ存し、打角約90度で剥片が剥ぎ取られている。東山の流れの中ではもっとも普遍的である。両端に打面を持つものは全く認められない。この特徴は、フレイクにも認められ、主要剥離面と交錯する剥離面はない。

石刃は整ったものがかなりあり、第2次加工を加えて作られた石器のガラエティーも多い。

ナイフ形石器には打面をわずかに残し、基部両縁・先端一線に第2次加工を加えたもの（図版第7-①②⑥）打面を残さないもの（同④⑤）等がある。この他にも二三形状の変わった個体が認められるが、未成品である可能性もある。この他に、欠損の状況及び使用痕跡により難に使用されたと考えられるものがある（同⑨-⑩）。これは先端にのみ第2次加工が加えられている。從来ナイフ形石器の部類に入れられているこの種のものに例品が認められる。

先刃型搔器は第1次加工によって作り出されたアヒルの嘴形の先端をわずかに加工して使用されており、刃先は小さい（同⑪-⑫、図版第8-①）。この地点においてもっとも特徴的な石器は彫刻刃形石器である。ほとんど全てが打面形成にあたって數度近くの打撃が加えられている（同⑬-⑭、図版第8-①）。図版第7-⑧は凹形削器とも考えられるが、2~3回の打撃により神山型彫器に近い刃先が形成されている。同⑮は丸盤形に刃先が整えられており、下端は先刃型搔器となっている。その他に大型の剥片を使った一種の搔器が発見されてい

る（図版第8-⑯）。

このような組成を持つ石器群の比較資料は今のところ県内にはない。県外では長野県杉久保遺跡〔危井編1963〕新潟県神山遺跡〔芹沢等1959〕例と、その製作手法の類似が指摘できる。しかし、第2次加工を受けた石器はかなり顔付きが異なる。本遺跡のナイフ形石器の形態の類似はむしろ山形県金谷原遺跡〔加藤他1959〕に求められるが、それでも製作手法に差異がある。

このような特異な存在は石器の石質の面からも言えそうである。石質は流紋岩系の石、安山岩系の石、綿文様の入った頁岩系の石が多用されており、これらは近隣に産するものが大部を占めるらしい。そのようなことから本地点の石器群は系統を杉久保あたりに持ち、かなり独自な石器組成及び石器形態を持ったものとして位置づけられる可能性が強い。

また速報〔橋本1972B〕では同地点4・5層の石器群に差異があるように報告したが両者に接合資料が認められたため、同時期と判断されることになった。ここに訂正しておく。

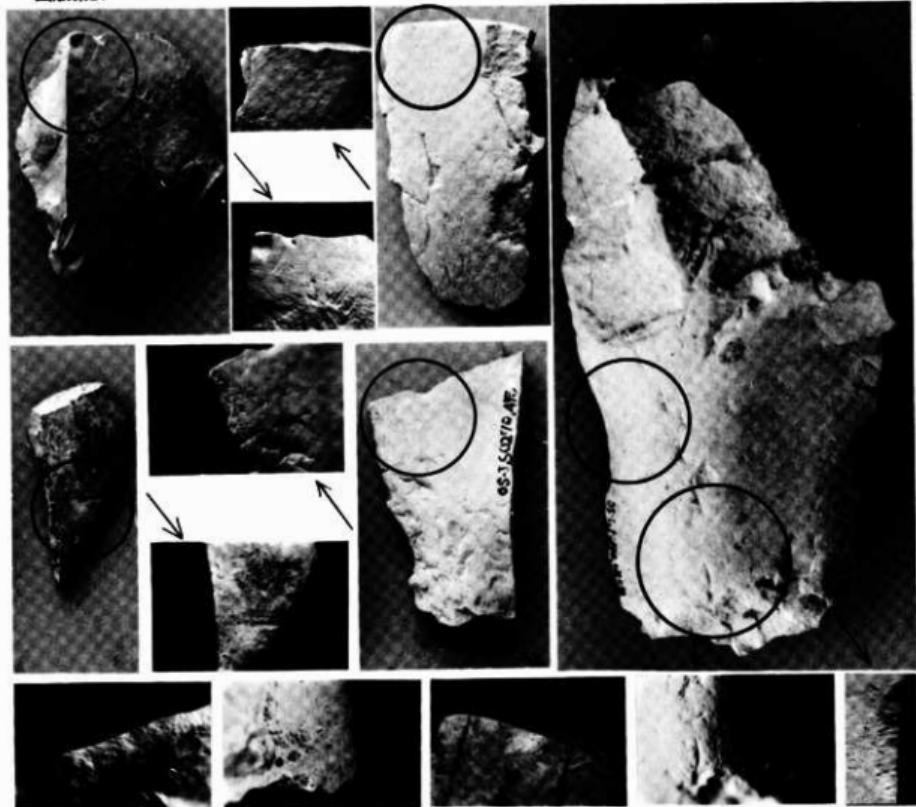
O S-I-2-P R 2 地点は、O S-I-1 地点と石器出土層位がよく似るが、内容にはかなりの違いが認められる。ナイフ形石器には第2次加工の範囲が多いもの（図版第9-①〔表抜資料だが石質その他の同地点の出土品と判断できる〕）、切出形に近いもの（同⑩）小型で黒曜石製のもの（同⑪）等がある。他の石器としては彫刻刃形石器（同⑫）、先刃型搔器（同⑬）、凹形削器（同⑭）等が認められる。剥片は全て石刃技術によらないで剥ぎ取られており、鉄石英・赤白色頁岩・チャート・黒曜石がある。石器としてはこの他に結晶質の目立つ火成岩系の礫を用いたチップバー・チッピングトールがある。この刃部形成によりできた不定制片がかなり発見された。また、同地点の近くから局部磨製石斧が発見されている（同⑮）。

このような組成を持つ石器群も今のところ県内には明確なものがない。第9圖-④のナイフ形石器は東京都比丘尼橋遺跡〔安孫子1971〕出土資料と類似しており、全体が関東地方の石器群と関係がある可能性が強い。

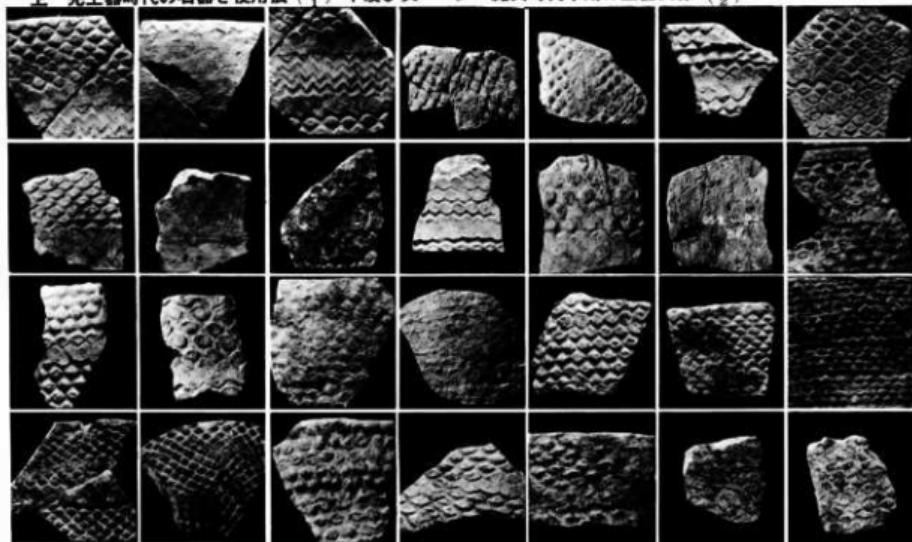
O S-I-1 地点と O S-I-2-P R 2 地点ではこのように両者の違いが明確であるが、逆に相互の関連を指摘することも可能である。

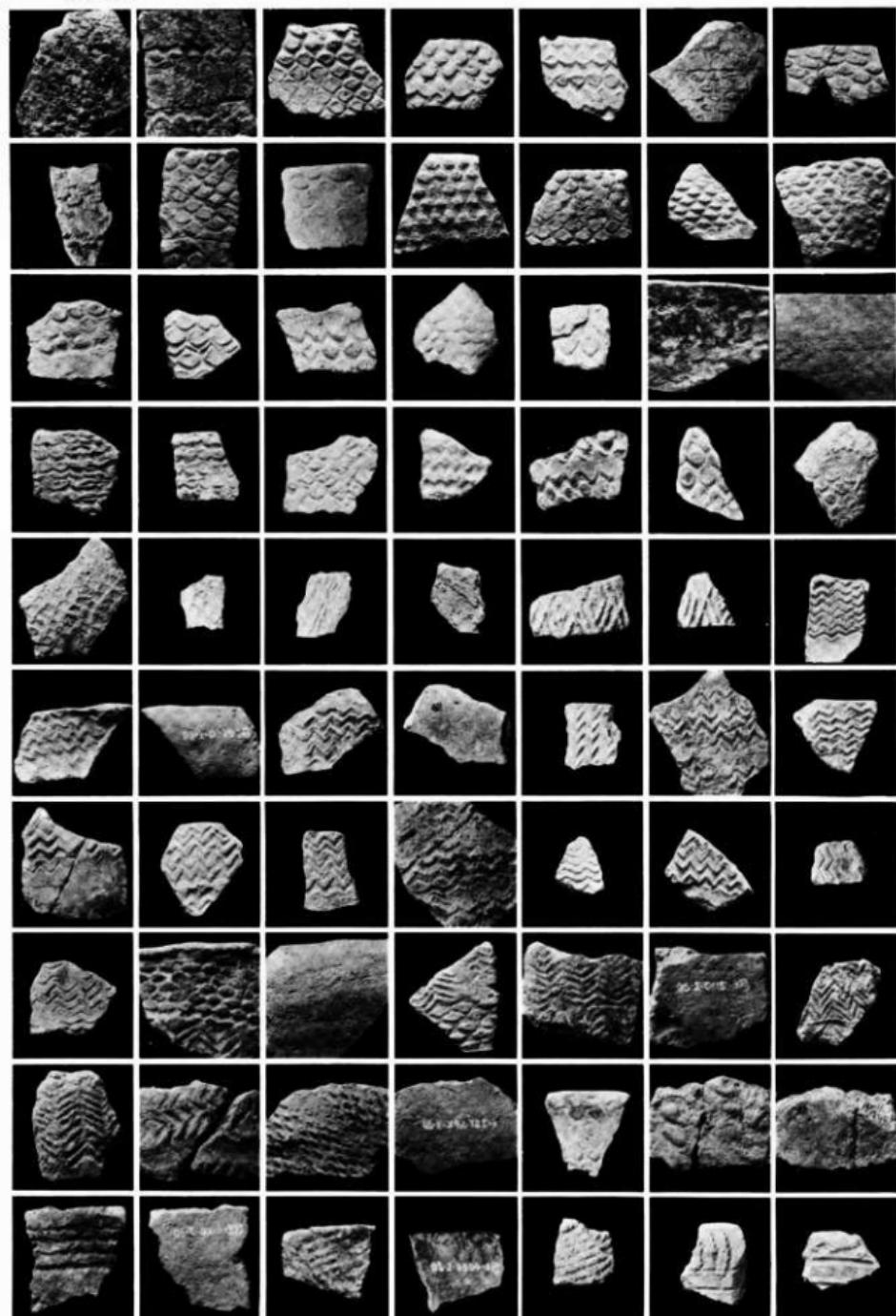
それは両地点で同一特徴を持つ石片が若干ずつ採取されていることと、先刃型搔器等に形態的類似点が認められることである。これらについては資料整理が完了した後に報告の機会を得たい。

直坂遺跡からはこの他に、両地点とは全く別グループ



上 先土器時代の石器と使用痕 (1) 下及び次ページ 裝文時代早期の土器文様 (1/2)





を形成しそうな石器が多数表面採取されている。明確な内容はもちろん不明であるが、整った小型のナイフ形石器（図版第8-⑤-⑨）、小板形石器（同図⑩⑪）、尖頭器（同図⑫⑬）、その他（同図⑭-⑯）である。図示しなかつたが、このほかに東山型ナイフ形石器に近いものも認められる。これらについても別に考察の機会を得たいがはなはだ内容が複雑なことを暗示している。

これらの石器群が時間的前後関係を持っているとすれば、かなり長期にわたって、しかも断続的に直坂遺跡が占拠されたことになる。県内における先土器時代研究に大きな目安を与えてくれる理由がここに存するわけである。

直坂遺跡からは使用痕跡をとどめる石器がかなり採取されている（図版第21上）。これの持つ意味については先に触れておいたが、図示した大部分は表面のなめらかな骨角類等を加工した段階でついたものと判断できる。他にぬめた光沢を持つ使用痕もあり、これには別の使用法が用意されるべきである。これも先土器時代における直坂人の生活を復原するための重要な手懸りと言えよう。

2 繩文時代草創期・早期の生活

繩文時代草創期の資料は先に述べたように数が少ない。もっとも明確にその内容がわかるものは図版第9-⑩⑪である。⑩は新潟県小瀬沢洞穴（中村1960）に例品が認められる植刀と形態が似る。製作手法もよく似ており、今後重要な位置を占める個体となろう。

早期の土器については先に目安を示したが、長野県・岐阜県南部地方と関係の強い群と、近畿・東海地方と関係の強い群に2大別できる。前者は更に3つの段階に分類され、後者は2つぐらに分けられそうである。この時代も先土器時代同様、かなり長期間生活がくり広げられたことがわかる。

石器は今のところ石鐵が知られるだけである。遺跡発見当初の報文（橋本1972A）では、図版第9-⑪-⑯の石器を早期と考えていたが、今回の調査では確認がつかめなかつた。OS-I-2-P R2地点及びP R1地点で、黄色土層の中から石質のよく似た石器が発見されており同資料が先土器時代に属する可能性もある。しかも、両者は地点をちがえて発見されたこと、製作技術にちがいがあること、風化変形がちがうこと等の理由から、まだ所属時期が決定できない。この問題は今後に残したい。

ここで直坂遺跡出土の回転押型文土器の施文原体について若干触れておくことにする。

直坂遺跡の施文原体は山形文、横円形文、格子形文に3大別できる。量的には横円形文がもっと多く、山形

・格子形と量は減少している。

全ての原体の印創作業は正確に規則正しく行なわれている。原体の両端の特徴は可見通宏氏が述べた〔可見1969〕2種類が認められ、可見氏の言うB種は後出の土器にのみ使用される。原体の印創を受けなかった表面には縦走りする細条痕が残っているものがかなり認められる。これは皮を剥がれた小枝の表面の状態とよく似ている。山形文の中に、可見氏の説く、削付用の縱線を残すものが1例認められるが、先に示した細条痕も文様削付けの日安になったものと考えられる。

横円形文はそのほとんどが1周2個の単位を取っている。原体の両端の切込みは相対するものと90度ずれるものがある。これは、上端に切込みを入れた円棒（原体より長めのもの）を最初の切り込みの方向に合わせて印創し、適当な所で円棒から原体を切り離したことを物語ると言えよう。直坂遺跡出土資料の中に、原体の一端を刺突した個体が認められる。原体の端の状態は、ややササくれだっているが、切込み面も観察できる。これから切り込みを入れた後に、ボッキリと折り取られ、切り離しが行なわれたことがわかる。このようなことから、原体はある種の木の小枝ではないかと考えられる。

やや特殊な原体としては、上・下の横円をすらさずに印創した横円形文や、削付にさいして、主軸を斜めに置いた横円形文がある。他に格子形文の発生と関係があると思われる、縦長の変形をした一種の横円形文がある。この仲間の一片にはほぼ同型の格子形文と併用押圧されているものがあり（図版第11-⑥右下）注目される。筆者はかつて回転押型文各文様の系統発生を否定する立場で小論を発表したことがある（橋本1968）。後、二、三の論文で反論を受けている（可見1969、金田1971）。先の小論で各文様の基礎と述べたのは印創テクニックのことを指している。印創の手法を残す個体は直坂遺跡の横円形文に認められる（図版第11-⑥上半）。横円部に横走する条線が數条残っており、原体と直交する方向に利器があてがわれ、左右に押し引きして印創作業が行なわれたことが理解される。この技術でどのような原体も印創できるわけであり、後は文様の形の認識と、それに沿って原体と利器の角度が調整されればことは足りるわけである。文様は伝統に根ざしながら一定の規則を持って多地域に広がることは理解できる。しかし、文様は個人の感覚と多くの人の共鳴があれば変化の度合いを調整することが可能である。回転押型文様の場合、よくかわり種の文様が散見できる。このかわり種の位置がそれをよく物語ってくれる。ここに各文様はそれを採用、製作、維持、破棄した集団の土器文様における嗜好の結果を示すだけと

少なくとも、全ての住居跡に認められる現象ではないので、先の考えを肯定すべきであろう。この風習は、先のカマボコ形もしくは馬蹄形住居の分布同様の広がりを持つ。これらは共通の系統に立つものと考えておきたい。
註①石川県の例を中心四柳嘉章氏の研究が発表されている（西井龍儀1971）。複式がの発生時期については、富山県例と時期をほぼ同じくするものと言えそうであるが、筆者の言ふ第2群Aの複式がは石川県では未発見らしい。

註②昭和47年富山県教育委員会により発掘調査された。調査を担当した小島俊彰氏の教示によった。

IV まとめ

- 前章までに述べた点と問題点を要約し、まとめとする。
- 直板遺跡は先土器時代と縄文時代草創期・早期・中期に中心にある遺跡である。
 - 先土器時代は石刃技術の発達した群と、未発達の群にわかれ、表様資料にはそれと別の構成を取る群が二・三認められる。
 - 縄文時代草創期資料は、断片的ではあるが重要な内容を持つ。
 - 縄文時代早期は、回転押型文土器群を中心があり、4ないし5群に細別できる。
 - 縄文時代中期は、後葉にその中心が置かれる。住居跡は6棟で石組が含む。若干の変遷が窺えできた。また、住居に添えられた埋甕の存在が特筆できる。
 - 問題点の一つは、先土器時代の遺物を包含していた「赤土」にある。土の成因と遺物の関係は後に研究されるはずである。
 - 縄文時代中期の住居跡はその時期決定がまだ行なわれていない。

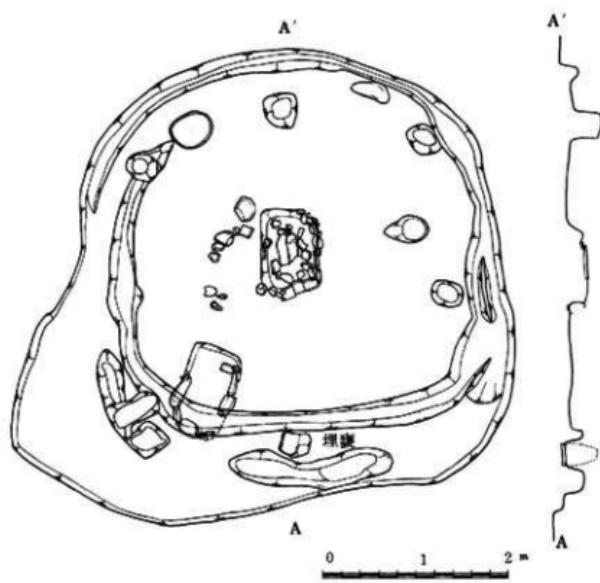
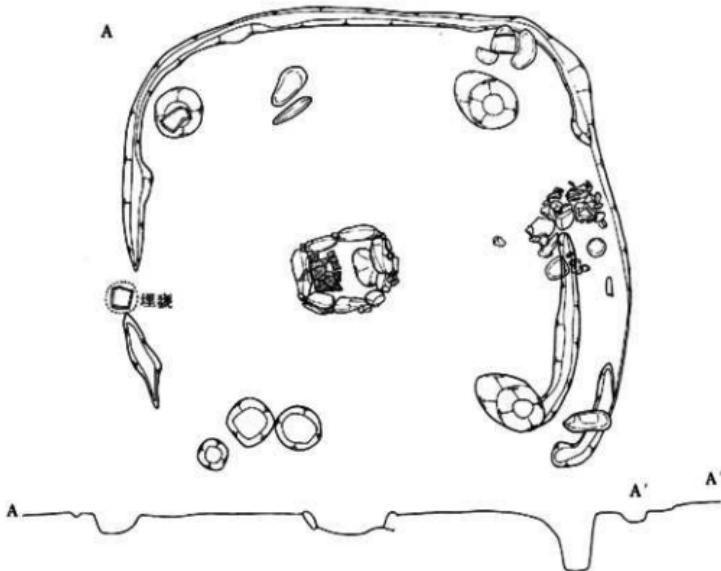
参考文献

- ア 安孫子昭二1971「練馬区北大泉町比丘尼橋遺跡調査概報」文化財の保護第3号
会田 進1971「押型文土器編年の再検討」信濃第23巻第3号
エ 江坂輝弥・早川莊作・森 秀雄1959「富山県中新川郡日新丸山遺跡」日本考古学年報8
カ 加藤 雄・小林幸雄1959「山形県寒河江市金谷原の旧石器群—新らしい様相を持つ石刃工作について」歴史第9号
龜井節夫1963「野尻湖の湖底を掘る」科学の実験第14巻第10号

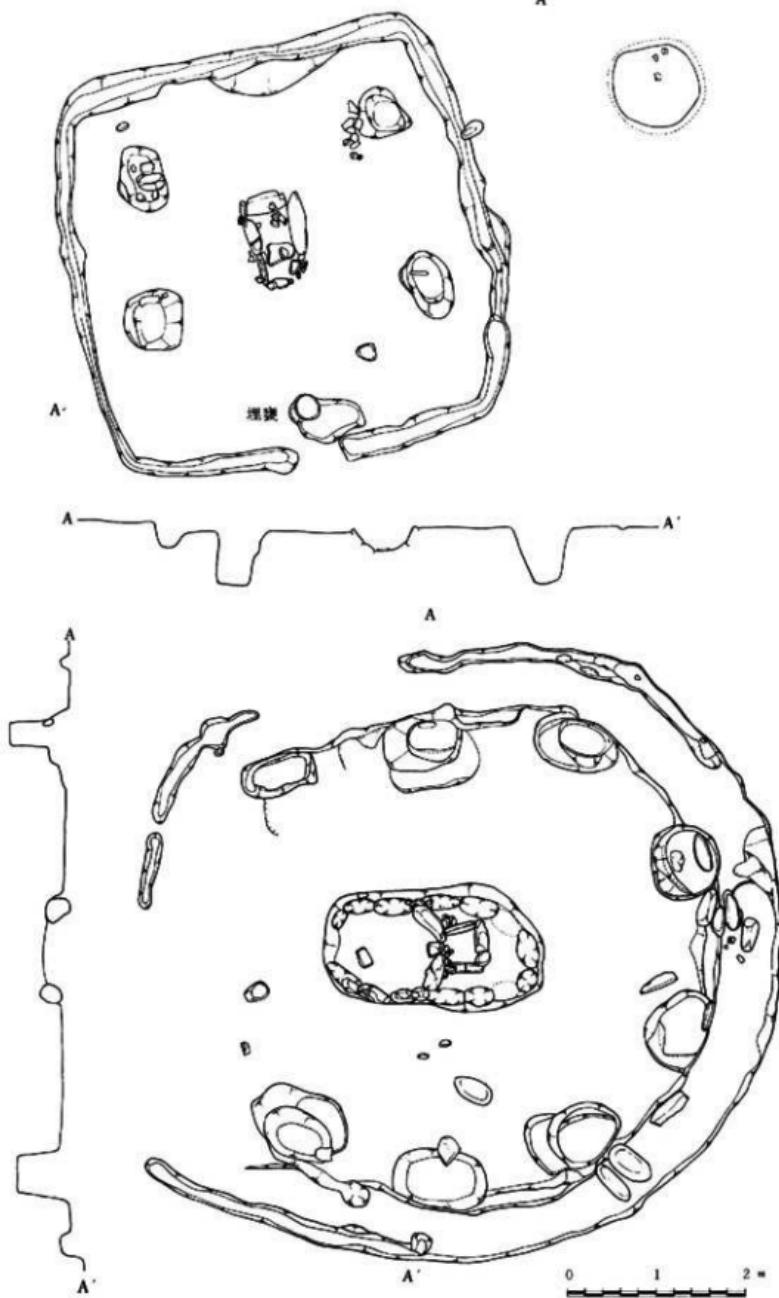
可見道宝1969「押型文土器の変遷過程」考古学雑誌5

55の2

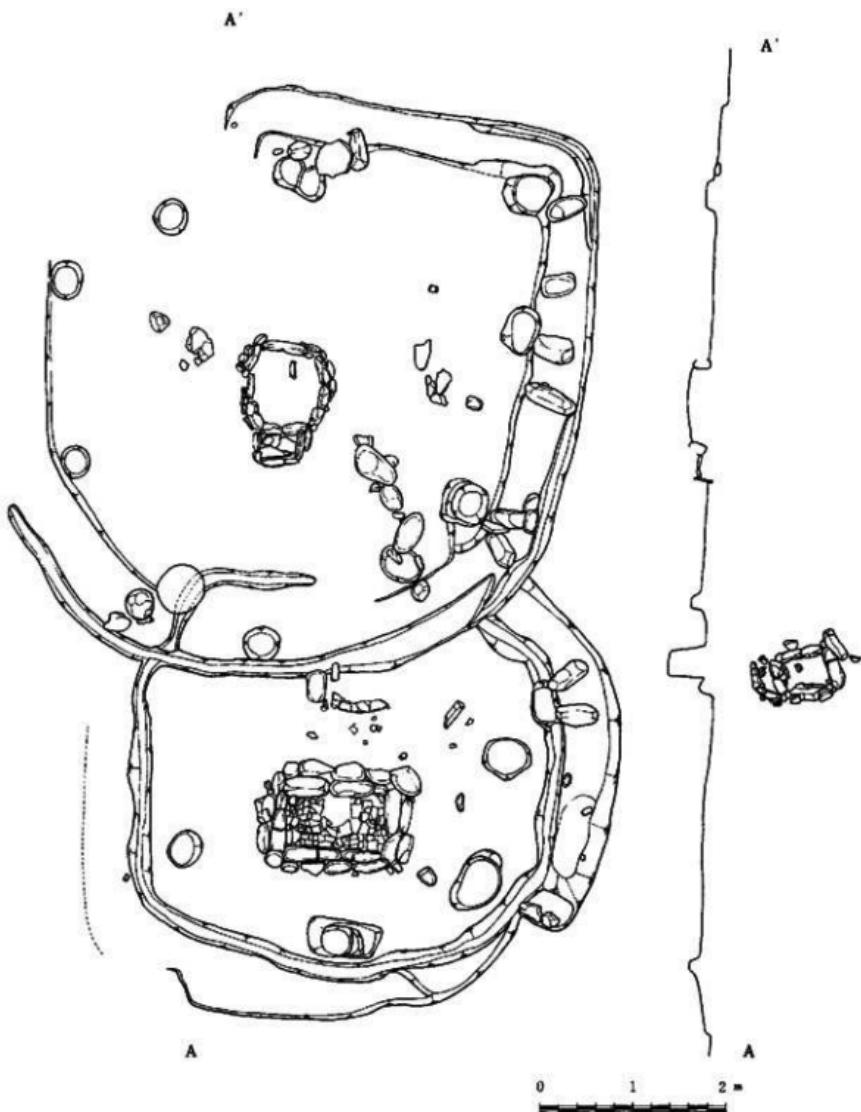
- コ 小林道雄・小田勝夫・羽鳥謙三・鈴木正男1971「野川先土器時代遺跡の研究」第四紀研究第10巻第4号
小島俊彰1972「四、縄文中期」富山県史考古資料編セ 芦沢長介・中村一明・麻生 優1959「神山」津南町教育委員会
タ 高畠勝喜1965「縄文文化の発展と地域性」日本の考古学II
ナ 中村孝三郎1960「小瀬ガ沢洞窟」長岡科学博物館研究報告3
ニ 西井龍儀1963「富山県の無土器時代道路について」越中史壇25
西井龍儀1966「安養寺遺跡について」大境2号
西井龍儀1968「人母シモヤマ遺跡の石器群について」大境4号
西井龍儀1972「先土器時代」富山県史考古資料編
ハ 橋本 正1968「回転押型文土器の問題—富山県の場合一」大境4号
橋本 正1972A「縄文早期、早期の石器」富山県史考古資料編
橋本 正1972B「速報富山県直板遺跡の調査」考古学ジャーナルNo76
ミ 渡 農・竹内俊一1971「愛本新遺跡調査概要」宇奈月町教育委員会
巳 四柳嘉章1971「石川県における縄文時代住居跡の集成」石川考古学研究会誌第14号
フ 渡辺 誠1970「縄文時代における埋甕風習」考古学ジャーナルNo40



図版第23 繩文時代中期の住居跡（上・1号、下・2号）



図版第24 縄文時代中期の住居跡（上・3号、下・4号）



図版第25 縄文時代中期の住居跡（上・5号、下・6号）

富山県大沢野町

直坂遺跡調査概要

発行日 昭和48年1月31日

発行者 富山県教育委員会

印刷者 富山スガキ株式会社